

こたえ かぐやひめ

はってん
発展 ②

かぐやひめ

(日本の古典「竹取物語」)

昔、竹取の翁^{おきな}とよばれるおじいさんがいました。ある日、おじいさんが竹林に行くと、根元が光っている竹がありました。切ってみると、中に、手のひらにのるほどの小さな女の子がいました。

おじいさんとおばあさんは、その子をかぐやひめと名づけて、大切に育てました。かぐやひめは、三か月ほどで、美しいおすめに成長しました。

かぐやひめのうわさを聞いて、多くの人がけっこんを申しこみました。けれども、かぐやひめは、むずかしい品物を持ってくるように言って、だれともけっこんしませんでした。

ある年の夏から、かぐやひめは、月を見ては、悲しそうに泣くようになりました。おじいさんがわけをたずねると、かぐやひめは答えました。「わたしは、月の世界の者です。この秋の満月の夜に、月へ帰らなければなりません。」

満月の夜、おじいさんは、たくさんの兵士にかぐやひめを守らせましたが、月からのむかえが来ると、だれも体を動かせなくなりました。かぐやひめは、おじいさんとおばあさんに別れをつけ、月へと帰っていきました。

1 おじいさんが見つけた竹は、どこが光っていましたか。

根元

2 かぐやひめが、けっこんを申しこまれたときにしたことは何ですか。

ア すぐにけっこんした。

イ むずかしい品物を持ってくるように言った。

ウ 月へ帰った。

3 かぐやひめが、月を見て泣くようになったのは、どうしてですか。

秋の満月の夜に、月へ帰らなければならなかったから。

4 月からのむかえが来たとき、兵士たちはどうなりましたか。

だれも体を動かせなくなりました。